

第一章 ミンナ 開会

オラシオ・カステ) 私たちは午前中に三つの症例のコメントを致しますが、これらの症例は制度の中で行われた、つまりスペインのエコールまたはシャン・フロイディアン協会と連携している、様々な都市の施設のなかで行われたものという特殊性をもっています。この3つの症例は制度のなかで適用されたラカン派の方向性をもつ精神分析が、いかに治療的に迅速な効果を持ちうるかを示しております。

エルヴィラ・ギラーニャ) アラセリ・フエンテスの症例は、3月11日のテロ襲撃後に創設された、マドリッドの Red asistencial の枠のなかで行われました¹。そこでは最長6か月のあいだ無料で治療を受けられます。アントニ・ヴィセンスによる症例は精神分析ラカン派のエコール (Ecole Lacanienne de Psychanalyse) の、バルセロナにある CPCT (相談と治療のための精神分析センター) で扱われたものです。その CPCT は2004年10月に創設されました。2003年の4月創設のパリの CPCT に相応するものです。ここでは無料の治療が4か月間提供されていて、最大8か月まで更新可能です。カルメン・ガリードによる症例は1997年創設のコルーニャのシャン・フロイディアンのクリニックで行われたものですが、ここではパラメーターが少し違います。料金が手ごろなのは同じですが一律ではなく各々のケースによって異なり、また利用可能期間に制限ありません。

この会話(大会)のために選ばれたそれぞれの症例を通して、私たちが社会的他者に訴えかけるこの新たな時に、自分たちの仕事のあるひとつの様相をとくに分析的な共同体に属していない人々に伝達することが重要です。1998年に出版されたジャック＝アラン・ミレールのテキスト「精神分析的治療への指示と反指示」²がそれを明らかにしているでしょう。これは新たな作業場を生み、「出会いの臨床」を定義しています。分析家との出会いは諸効果を生みます。こういう効果は伝達されうるものです。これから続く諸症例においては、受け入れ態勢がこの出会いを容易にするよう考えられていますが、それがなければ出会いは困難かもしくは不可能でしょう。これから私たちが討論する6つの症例のそれぞれのなかで、一つの特異性を把握することが出来ますが、それこそまさに分析家が際立たせるために聞かなければならないものです。ですか

¹ Red asistencial は2004年のテロの後に、心的外傷を被った人々のケアのため緊急にマドリッドで設立された相談機関のことで、スペインのエコールが全面的に協力した。

² Mental, n°5, 1998 に収録

ら私たちはある出会いの臨床を検討することになります。それはここで迅速な治療的効果を引き起こしています。面接の回数をはっきりさせる必要があるのはそのためです。ある症例では20回、別の症例では3回、3つ目の症例は10月から春まで続きました。午後の部では「ブリーフセラピー」「焦点づけセラピー」なども考慮に入れながら、私たちが「迅速な治療的効果」という言葉で理解しているものをより正確に見定めることになります。これから討論するアルセリ・フェンテスの症例は、トラウマの事後性において打ちひしがれ、罪悪感をもってやって来た女性の症例です。アルセリは討論に適した仮説を提供しています。主体の無意識の特殊性において、意味の網目とトラウマの記載を復元することが大事であるということです。そこにこそ治療的なものがあるのでしょう。

人生の糸、アラセリ・フェンテス

ミンナは38歳のルーマニア移民で、マドリードに来て1年半になります。私たちの組織に紹介されてきた、3月11日の最初のテロ³犠牲者です。

3月11日、彼女は仕事に行く前に友人たちとお茶をしながら長居していて、アトーチャにいました。爆弾が爆発した電車で彼女がいなかったのはそういう理由でした。爆発に驚いたとき彼女は友人たちとカフェテリアにいましたが、つづいて二度目の爆発が聞こえました。彼女はすぐに爆発物だと思い、恐怖に捉われ誰のことも待たずに走って出て、恐れおののきつつ負傷者と死者たちのあいだをぬって逃げました。その間、彼女は一人の男性の視線に合いますが、彼は地面に寝かせられ、その顔は血にまみれ、「横たわるキリストのよう」でした。「横たわるキリスト」の像は毎晩彼女を悪夢のなかで見つめ続け、悪夢はその日から反復するようになりました。

不安

初回、彼女は不安に捉われていました。数日前から動揺していて、まったく休めていません。彼女は救急外来に駆けこんだものの安定剤はすべて拒否して、区役所で心理士と二度面談をしていました。またルーマニア外務省の保護下に身を置く目的でルーマニア人たちに合流しようと試みますが、彼女が留まれるような場所を見つけることはまったく出来ませんでした。

ミンナはスペイン語がうまく話せません。涙ながらに自分を理解してもらお

³ 2004年3月11日スペイン首都マドリードで起こったイスラム過激派による列車同時爆破テロのこと。

うと努力していて、彼女は駅から走って脱出したこと、負傷者を助けるために留まらなかったこと、父親から教えられている理想の高みにいられなかったことについて、自分は咎められるべきだと感じていました。彼女の父親は愛そのものの父で、信心深く、セブンスデー・アドベンチスト教団に属しています。パンのかけらを贈り物に変えることのできるこの貧しい父親は、他人の攻撃に出合ったらもう片方の頬を差し出せと、彼女に教えていました。彼女は負傷者を助ける義務を果たさなかったわけですが、「横たわるキリスト」がそのことを毎晩繰り返される悪夢のなかで彼女に思い起こさせるのでした。

トラウマの現実界に直面して、愛そのものであるようなある父への呼びかけは返答を得られません。彼女は不安に捉われたままで、宗教的な意味の道をとおした補綴の試みにも失敗します。

私は彼女を受け入れましたが罪悪感から彼女を解くことはせずに、沈黙を守りました。過ちはやがて他者に移動し、咎められるべきは他者であり、「モロッコ人たち、テロリストたち」になりました。ここで罪悪感は憎しみに場を譲りますが、憎しみはこの日まで彼女にとって経験したことの無いものでした。

トラウマ的な出来事が突如彼女を憎しみと対峙するよう導きました。そこから私自身の立場（位置、ポジション）にかんする論理を導きますと、理想を唱えるような立場の正反対となります。それは憎しみが口にされるのを聞きとり、その道が開かれたままであるように維持することで、これはいつか彼女が自らの存在のなにものかを、主体化することが出来るようにするためなのです。それが、この治療が要した20回の面接で私が従った方向性でした。

ミンナは自分の話を語りはじめ、徐々に落ち着いてきます。信心深いと同様に貧しい家庭の娘で、早い時期に勉強を放棄して結婚します。「私は勉強よりもむしろ愛を選びました」と言います。彼女には19歳になる一人息子がいて、大学へ行くためルーマニアに留まっていたのですが、これは息子の欲望というより彼女の欲望により対応しているようです。彼女はつねに息子を甘やかし、彼には冷蔵庫のなかに特別な場所を用意していました。彼女の夫もまた彼女の後数か月してスペインに移住しました。夫は彼女とはべつの都市で働いているため二人は別々に暮らしているのですが、週末は夫の方が彼女に会いに来るのです。

ある日、テロリストたちがスペイン高速鉄道をハイジャックしようと試みたと知って、彼女は新たに極度な不安のなかやって来ます。日常の世界が俄かに見知らぬものになってしまったのでした。「私はここで何をしているんだろう？」と彼女は自問します。友人たちの何人かはルーマニアに帰国することに決め、彼女もまた帰りたい気持ちになります。彼女は息子が懐かしくなりました。この国に来たのは働いてよりよい生活を得るため、そこで彼女は温かく迎えら

れたと感じて、こんなにも愛していた国だったのですが、それが今や奇妙なものになってしまったのです。

無意識の開きが速やかに生じました。というのも彼女は次の面接で私が頼んでおいた辞書を持ってくる同時に、転移の夢も持ってきたからです。「生命も、光もない、奇妙な死の道を私は進んでいきます。二人の友だちと一緒に、もう使われていないとても古びた駅に入ります。友だちと私のあいだに突然、三つの爪のような先端がついた巨大なクレーンのアームが落ちてきます。その時私は友人と離れているのが分かり、再び合流するためには大きく迂回しなければならないようでした。私の周りにはたくさんの人がいて静かに私を見つめています。一人の女性が私に話しかけてきて、彼らは大勢いるのだから彼らと一緒に留まるようにと私に言いました。」

転移が成立したことで彼女は留まるが出来るようになりました。この時から無意識の道は開かれ、これに続いた出会いのなかで一連の夢が生じることになりました。これらの夢は解決をもたらすもの（résolutif）という特殊性を持っています。つまり意味の網目の回帰と、主体の特殊性におけるトラウマの記載が治療的なのだということです。それを時系列にそって紹介します。

夢

最初の夢、トラウマ後の悪夢。彼女を見つめ、負傷者を救助する義務を怠ったことを毎晩思い起こさせる「横たわったキリスト」の男性が繰り返し悪夢に出てきます。この悪夢は速やかに消え去りました。

第二の夢。これは転移の夢ですが、視線はまだ存在していて（「たくさんの人がいて静かに私を見つめています」）、それから一人の女性が彼女に話しかけて留まるように誘います。ミンナは自分を迎え入れてもらう術を知っている女性です。彼女が働いていた家ではかなり良い扱いを受けていて、彼女は雇い主たちをマドリードにいる自分の家族とみなしているほどでした。夫が働く都市に行きたくはないのかと私が尋ねると彼女はいいえと言い、「それだと一から始めるようなものでしょうから」と答えました。しかしながら週末に夫が来ると彼女は自分がいつもより落ち着くと感じるのです。

第三の夢。彼女はある出口を見つけ、取り上げます。「私はブカレストの下水道にいます。そこにはドラッグをやるととても貧しい人たちや子どもたちがくっついて住んでいます。私はそこから出なくてはならないのですが、私の後ろにはジプシーの女性がいます。トンネルの先には光があり、私にとってこの光はとても重要なんです。脱出しますが、私にはジプシーの女性が見えません。」ブカレストの下水道のトンネルからの脱出に成功する夢で、そこにはドラッグをやっている貧民と子供たち、そしてジプシーの女性がいますが、これは周辺に

追いやられた人々、社会のくずたちの隠喩です。光に従って進み、彼女は出口を見出します。この夢は母親が彼女に言ったことば「ジプシーは不幸をまっとうしている」を否定しにきています。母のべつのことばは「もしお前が夢を見て、目が覚めたときに光を見るなら、夢は忘れられてしまうよ」でした。ミンナは付け加えます「夢のなかで私は一人で脱出して、ジプシーの女性は私の後ろを歩いています。私は強いんです。目が覚めると窓からさす光を見たのですが、夢を忘れることはありませんでした」。

それと同時に彼女は息子を懐かしがります。息子と電話で話します。彼は自動車が故障したが祖父母は助けようとしてくれなかった、というのはそれは土曜日で、宗教で安息日と決まっているからだと言いました。この日は日中何もしてはならないのです。彼女は息子の手助けよりも宗教的な掟を優先する両親に激怒します。「私はそれを選ばなかった」と怒っていました。

ミンナは職場に行くためにアトーチャ駅を毎日通るのですが、時々立ち止まって死者たちの名前を読みます。「死者たちの名前を読むんですけど、誰のことも知りません。」と私に言います。

4か月が経ち、ミンナは少し良くなりました。次の週末「カイドスの十字架」（スペイン内戦戦没者に捧げられた慰霊碑の十字架）を訪れるつもりと言います。悪夢のなかで彼女を見つめていた「横たわるキリスト」である男性に立ち戻る「十字架」というシニフィアンを再び取り上げているだけであったにせよ、私の注意を引くのに十分なことでした。

第四の夢。「人生の糸」。ある面接の後、彼女をはじめ馬鹿げたことと形容する夢を語ります。「ねじの夢を見ました。私はねじの周りに糸を巻きつけていて、それを解いたり巻いたりしています。解いているよりも多く巻いていました。」私はねじ（vis）はルーマニア語でなんと言うのか？と訊きました。彼女は「その発音はほとんどエヴァを誘惑したセルパン（蛇、serpent）とおなじです」、それからこう付け加えました「幸せが完璧な私たちで存在していた楽園からの追放です」。そして連想をつづけます「ルーマニア語で人生の糸（le fil de la vie）という表現があるんですけど・・・この表現はスペイン語にもありますか？」。

第五の夢。彼女を笑わせる夢が報告されます。「一匹のワニがいて私以外のみんなを噛んでいます。私はその尻尾をつかまえて宙に逆さ吊りにします、頭部が下になっています」。この夢のなかで彼女はファロスを持っていて、それをどうすべきかを知っています。

第六の夢はあとでコメントします。

第七の、最後の夢。「私は目を覚ましました、するとベッドの足元に顔のない一人の男性がいました。私が感じたのは安らぎの感情でした。」

「横たわるキリスト」の超自我的な視線が彼女を目覚めさせるほどに悩ませ

ていた最初の悪夢と、「顔のない男性」が安らぎを与えるという最後の夢に至るまでに何か月も過ぎました。そのあいだに不安は消え去り、彼女は笑うことができ「人生の糸」を取り戻すことができたのです。

この夢のなかで一人の「顔のない男性」によって目覚めたという事実がもたらした沈静化の効果は、視線と口の不在に帰するもので、死の視線の不在と非難の口の不在に帰するものなのです。

嚢胞

面接の最後のほうでは、ミンナは満足していました。最終的に息子がルーマニアでの学問をあきらめることにし、スペインに生活しに来て働くことに決めたのです。彼は父親といっしょに働くつもりです。親はスペインで働いているのに、自分はルーマニアに勉強のために留まるというのは恥ずかしいと打ち明けました。現在彼女は滞在許可の準備に専念していて、元気にやっていて、組織があらかじめ告げている治療期間のリミット—6か月—が近づいているところでした。

しかしながら私は大変驚いたのですが、最後のほうの面接のある回、彼女は何か月も前からそうじゃないかと思っていたのだがじつは子宮に嚢胞があり、ほんの数日前に医者に行ったところですよと言いました。明らかに、この期間ずっと彼女はそのことを知りたくなかったのです。つまり体の中にこの脅威が現にあることについて彼女は話すのが遅れ、それは3月11日より以前からのものなのにやっと今になってこの問いに取り組んでいるというわけです。彼女はその除去と検査のために外科的な処置を受けなければなりません。彼女はテロよりも不安は少ないと言っていますが、カルミナ・オルドネス（第六の夢）の夢を見たとき私に言い、それは若い女性で、おそらく自殺を図ったらしく当時まさに死にかかっていた女性です。カルミナは彼女自身で、この夢が上演しているのは彼女自身の死の出現なのです。

幸運なことに手術はじきに行われ嚢胞は害のないものと分かりました。組織が定めたリミットにまだ少し時間が残ってはいますが、私たちはこれが最後の面接であることに意見が一致しました。彼女は自分が元気であると感じ、顔のない男性の夢を語り、これが最後の出会いになりました。私たちは温かい関係のままバカンスに入ったのでした。

二つの現実界 (les deux réels)

この20回の面接のなかで得られた治療的效果には疑いの余地がありません。トラウマ後の症候学は消え、主体は「人生の糸」を取り戻しました。

しかしもっとも大切な治療的效果は彼女があのもう一つの現実界、あの嚢胞

に取り組んでいるということです。これは彼女が知らないふりをしたかったものですが身体と生命をおびやかして、悪夢に現れた横たわるキリストのような終わりに彼女を導いたかも知れないものでした。

この症例の治療的な効果は素早く生じた脱理想化のおかげで、リビドー的な意味を生産する装置としての無意識が機能したことによっています。夢はここで中心的な位置を占めています。第一の「横たわるキリスト」の男性の悪夢と、最後から二番目のカルミナ・オールドネスの死の夢は、特別な地位を持っています。つまりこの二つの夢のなかでは、死の現実界が脅威としてすぐそこに存在するのです。この脅威は移行したのですが、それははじめ外部から主体に押し付けられたトラウマ的な現実界の出来事の偶然性にあり、そこから身体における嚢胞の現存に一彼女は数か月間放っておいたためそれを発達させてしまったのですが一移行したのです。一つ目の現実界の出現は二つ目の現実界を扱う機会となったのです。それとはべつの系列の夢は、無意識によって提示された解決を生み出しています。その解決とは「出口を見つける」、「人生の糸を取り戻す」、「ワニの尻尾を捕まえる」のことです。この系列のなかでは、最後の夢が最終地点を示しています。つまり彼女のベッドの足元にいる「顔のない男性」が安らぎを回復させるということです。この治療においてはまさに無意識自体が指し縫いの点 (*point de capiton*) を打っており、そこにこそこの治療の特殊性があるのです。

会話

現実界は無法地帯である⁴

ピエール・ジュール・ゲゲン) 私が驚いたのは横たわるキリストの像が面接のなかに速やかに現れることで、この像はトラウマ的な悪夢のなかで患者を見つめていました。私たちはここでただちに幻想の地図の上にいるように思います。続いて夢は隠したり含みを持たせたりしに来て、さらには出発地点であらわになったこの視線について別の展望を与えにやってくる。恐ろしい視線のキリストのイメージから、視線も顔もない、つまり表情のない、平和をもたらすような男性のイメージへと移るのです。あなたが「意味の復元」ということばで理解していることと、「トラウマが主体の特殊性のなかに記載される」方法について、もう少し説明していただいてもよろしいでしょうか？一人の女性が問題になっているという事実は、地に倒れた男性という幻想の出現にとり重要なことでしょうか？これは幕の背後に死んだ男性がいるという幻想のひとつのバージョンでしょう。ラカンはそのについて「女性のセクシャリティーに関するある

⁴ Le séminaire XXIII, pp137

会議のための指導的提言」のなかで語っています⁵。

アラセリ・フェンテス) 発展させることは出来なかったのですが、私が意味の網目について語るときその側面にも依拠しています。女性のインクブス⁶との関係が問題になっていて、ラカンがそのテキストの中で語っていて、それは女性の享樂に関するものです。治療的に作用したものについて語るとき私は無意識のメカニズムが動き出したことと関連づけています。意味について語るときは無意識的な意味ということですが、リビドーの再活性化もまた生じていて、それは夢のなかで言われていることです。それから無意識が開くときに、この開きは長く続くことが可能であることにも私は気がつきました。この症例でたぶん最も顕著なのは、夢自体が多く的事柄を解決することを可能にしているように見えることです。解決的な夢が問題となっており、数年を要するような無限化の道に開かれるような夢ではありません。無意識が主体の現在の諸問題を解決する方法を見つけているのです。

ピエール・ジュール・ゲゲン) 私たちは断固とした主体に関わっていると思います。明らかに精神分析についての知識は持っていないにもかかわらず、精神科医たちが薬を提案しても彼女は言葉による治療を選んでいるということです。

アラセリ・フェンテス) 彼女が夢を語り始めたとき、フロイトを知っているかどうか、その名を聞いたことがあるかどうか私は訊きました。彼女は何回かはいい、と言いました。しかしとりわけ表れているのは、母親がどれほど間違っているかをこれらの夢は偶然にも明らかにしているということです。母親は人が夢から覚めて光を見たら夢は忘れ去られる、さらにジプシーの女性を夢にみるのは縁起が悪いなどと言っていました。しかしながらルーマニア出身の大変貧しくヒステリーの移民女性が問題になっています。彼女は3月11日の後にやって来た最初の女性患者でしたが、国に来てまだ間もない人にとっては驚くべきことでした。私たちのもとに彼女を送ってきたのは、シャン・フロイディアン研究所に学ぶ、一人のテレビカメラマンでした。

アントニ・ヴィセンス) 一ある側面が私には印象的です。それは愛から憎しみへの移行し、また愛への回帰することです。この症例には弁証法の三つの段階のようなものがあります。まずはじめに、愛そのもののような父が存在し、こ

⁵ Ecrits, pp733

⁶ 中世キリスト教で睡眠中の女性との交接にふけるとされる悪魔

れは神の定義ですけれども、しかも返答しない父であります。この返答の代わりに罪が憎しみへと変貌をとげるのです。モロッコ人、テロリスト、ジプシーたちへの憎しみです。続いて学問への愛情が現れます。症例の初めには大変興味深い文章が存在しますが、それは彼女が「信心深いと同様に貧しい家庭の娘で、私は勉強よりもむしろ愛を選びました」と言うところで、しかも彼女は大変若いうちに結婚しました。しかしながら、知への愛はすでに、学問をあきらめてもそれ以降待機状態で記載されているのです。夢という夢がここまで見事に転移の夢であるのはおそらくそういう理由なのでしょう。彼女に語りかける一人の女性が、留まるよう、いわば知を得るよう誘っています。その女性は知の装置のなかに自分の身を置きなさいと誘っているのです。ですから私は三つの段階を見ます。答えることのない、愛そのものであるような一人の父への愛、憎しみの出現、そして最後に新しい愛の出現で、これは知への愛であります。

ミケル・バツソル) 私が考えるのは愛と学問のあいだのこの区別につづいて登場する息子のことです。19歳で母の願いにしたがってルーマニアに残っていましたが、それはまさに勉強するためでした。私にとって謎の一文はこれです。「彼女はつねに息子を甘やかし、彼には冷蔵庫のなかに特別な場所を用意していました」・・・(笑)。

ジュリオ・ゴンザレス) 私の質問は憎しみの行く末についてです。この感情は彼女にとっては新しいものでした。

ラザ・カルヴェ) 母親のセラピーが息子にとり治療的な効果をもったことは明白です。彼は一種の人質のように故郷にいたけれども、そこを離れてこちらに住むためにやって来るのですから。「冷蔵庫の息子」と悪夢のあいだには、どんな関係がありうるのでしょうか？

アラセリ・フエンテス) 「冷蔵庫の息子」には私も驚きました。この女性はじつのところ息子のため食べ物で冷蔵庫のある特別な位置に保存していました。彼女は息子を人生とその困難から守ることにこだわっていて、彼女が望んでいるのは・・・

オラシオ・カステ)・・・息子を冷蔵庫に置くことです。

アラセリ・フエンテス) そのとおりです。それこそ私の書き間違い(lapsus calami)

7から引き出しうる部分です。というのも、ローザ・カルヴェが知らせたように、息子がルーマニアに留まることに彼女は執着していたからです。彼女と夫は息子のためにスペインで働いていましたし、テロの後も、息子が何事もなかったかのようにやり続けることを彼女は望んだようです。息子は幸いにも反抗的であり、ここで自分も働きに来るために父を支えとしました。これらすべてのことを私は症例を書いているときには気が付きませんでした。

アントニの質問についてお答えします。たしかに愛、憎しみ、そして愛そのものである父親に関連づけられる罪悪感を、一連のものとしてみなければなりません。父親はあまりに愛に満ちていて、家に帰ってお土産を渡すことが出来ない場合は、パンを持ち帰っていました。これは存在していない一人の父親で、欲求 (le besoin) を贈り物に変えることができるような父親です。このようにして彼は持っていないものを与えていました⁸。しかしこの父の別の顔は、例えばべつの頬を差し向けろ⁹というような、宗教的なあらゆる掟であり、それを彼は娘に伝達していました。

彼女は宗教的な道によってトラウマに意味を与えようと試みますが無駄に終わります。それは罪悪感に結び付いていて、当初の反復的な悪夢のなかにあらわれていたものでもあります。横たわるキリストの悪夢で、その視線のせいで彼女は眠ることが出来なかったのです。

そののち、この罪悪感は憎しみに方向を変えます。女性患者は最初負傷者たちを救わなかったという罪悪感におびえています。つづいてその罪を殺人者であるテロリストたちの責任と考えます。彼女は憎しみを感じていることに驚いていますが、それはあたかも憎しみをかつて体験したことがないかのようでした。私は彼女がそれを言うがままにしましたが、彼女の憎しみが人種差別主義として強化されるようなことはないようにしました。

この憎しみへの急き立て (poussée) は彼女にある種の脱理想化が起こることを可能にし、それがのちに彼女が両親にたいして怒るエピソードに現れることとなります。セブンスデー・アドベンチスト教会に属している両親は土曜日にはそれがなんであれ働くことは禁じられています。車が故障した息子を助けに行くのを彼らが拒んだ時、彼女は怒りはじめました。憎しみは両親の宗教的理

7 書き間違いのことをスペイン語でこう言う。アラセル・フエンテスは「彼女は冷蔵庫のなかに息子の食料を置くための特別な場所を用意していた」と発表原稿に書くかわりに「彼には冷蔵庫のなかに特別な場所を用意していた」と書き間違えた。これはミンナが息子を冷蔵庫のなかにも閉じ込めて保護下におきたかっただというフエンテスの考えが書き間違いに現れたものだと、彼女は言っている。

8 「持っていないものを与える」は、ラカンによる「愛」の定義。

9 「もし、だれかがあなたの右の頬を打つなら、ほかの頬をも向けてやりなさい。」マタイによる福音書 第五章三十九節。

想から彼女自身を切り離すことを可能にし、彼女は「それは私が選んだことではない」と言うことが出来ました。これは私の仮説です。

リカルド・アランツ) ポイントが二つあります。憎しみにかんしては、私は鼠男の症例を思い出しまして、フロイトはそこで鼠の拷問について「彼自身は知らない享樂¹⁰」のことを語っています。この女性の、憎しみとの出会いというのは彼女が知らなかった享樂との一つの出会であるとも読むことが可能です。二つ目の質問は辞書を持ってくるようにいう要求についてのことです。何が問題になっているのでしょうか？おそらく誰かが分析家の話す言語を話さない場合には辞書を要求するのが適切である、というような事柄ではないでしょう。むしろ転移的な操作が問題になっているでしょう。

マニュエル・フェルナンデス・ブランコ) 反復される悪夢はトラウマの臨床とは何であるのかをよく示しています。この女性は爆発物の夢は見えていません。反復するもの、それは夜毎に彼女を見つめることをやめない、横たわるキリスト像なのです。この像はシニフィアンの網目を、夢の作業を逃れています。ここにあらわれているのは主体によって同化されない、外部として内奥にある (extime) 享樂の一点です。その鍵となるのはたぶん、愛である理想的な父親というものの下に、自分の子どもを犠牲にする一人の父親の享樂があらわれているということでしょう。患者の父親はべつの頬を差し向けること、犠牲に身をささげること理想としています。大文字の父の息子、血まみれになったキリストといった、息子の犠牲という主題が症例中を駆け巡っています。

エンリック・ベレンガー) 分離についてアラセリが言ったこととの関連で言うと、これは移住が分離の試みとして未完了であるような症例です。私たちが理解している意味では、分離というものが始まるのはトラウマ以降のことではありません。横たわるキリストは対象—彼女にとりこれは負傷者たちのことで—から自らを引き離した (分離した) ことで彼女を非難しています。横たわるキリストが彼らとともにその場に留まるよう彼女に呼びかけます。次に、一人の女性が彼女に留まるように提案します。彼女が留まるように誘う、二つの夢があるのです。真に彼女が自分の身を引き離すのは、第三の夢になってからです。分離の主題系は第四の夢にもあらわれていて、そこで彼女は天国から追放されているを見ます。彼女は移住することによって為したことについて自問しているかのようです。というのも父親の謎めいた死に至らせしめる欲望によ

¹⁰ 「その表情を私は、彼自身も気づかない彼の快感に対する、激しい嫌悪感の表現としか解釈しようがない。」フロイト著作集 9、222 ページ。

って呼ばれた場所から自身を引き離すのに、移住は不十分だったからです。したがって二つの作用が存在しているのです。理想的だが超自我的なシニフィアンから身を引き離すことと、失墜した対象、駅の負傷者たちから身を引き離すことです。

アラセリ・フェンテス) これらのコメントは私にとりとても重要なものだと思います。辞書に関しては、この道具を主体に持ってくるように頼むことが規則であるとは思いません。私は彼女が感じているのが恥なのか罪悪なのか知りたかったのですし、一方彼女は言語を十分に使いこなしていませんでした。じつは私たちが辞書に助けを求めたのはただ一度きりで、最後は彼女がうちに持って帰りました。

マニュエル・フェルナンデス・ブランコのコメントとその「犠牲になった子ども」の仮説については、父親が宗教的な理想にとりわけ厳格であること、それから実際に彼女は息子をルーマニアに残していったのだということと言わなければなりません。最後のほうの面接で、彼女が膝の腫瘍に苦しんでいて、それを数か月間彼女は無視していたこと、それもテロ以前に発見されていたものだったことが明らかになり、私は驚きました。ですからこの腫瘍は少し前からすでに発達していたのです。医者に行ったと私に告げる前であったにも関わらず「カイドスの十字架」へ遠出をしたことが私の注意を引いたのは、そういうわけだったのです¹¹。たしかに横たわるキリストというシニフィアンが再び現れています。

移民の女性が問題となっていて、トラウマ的な出来事によって生じた穴が存在しなかったならば、たぶん彼女がそれらすべてを問いに付すようなことは決してなかったでしょう。そしてやり遂げることが出来なかった分離というものが彼女にとって可能となったのは、たぶん現実界のおかげなのでしょう。

X) それから腫瘍との分離も存在していますよね・・・

アラセリ・フェンテス) それは本当です、腫瘍も存在していますし、それは根本的な事柄です。心理状態の治療的な改善が続いていたときにも腫瘍は大きくなり続けていて、打ち負かされるかも知れないものを彼女はやられるがままにしていました。

ルシア・ダンヘロ) 症例を別の方向から扱ってみたいと思います。治療の指針

¹¹ (原注) 名誉の戦いで命を落とした戦没者を記念して捧げられた場所が問題となっている。そのモニュメントはフランコ独裁政権下に建立された。

における分析家の位置のことです。私が本当にすばらしいと思うのは、夢という無意識の形成物の増殖です。ピエール-ジル・ゲゲンの意見と同じく、分析態勢（dispositif）への入り口は幻想であり、症状ではないと思います。

アラセリが使った「解決的な夢」という表現ですが、私にはすごく当を得たものだと思います。これはジャック-アラン・ミレールが何年も前に発展させた「無意識は解釈する」というテーゼを例証するものです。このテーゼが問いを提示しているのは、解釈を生産する無意識の精髓に直面したときの、分析家に残されている位置にかんしてです。それから実質上分析家の解釈というものがこの治療にはひとつも存在しないということにも留意したいと私は思いました。

私が思いますに、ある一つの選択こそが、幻想的な形をとる中で明らかにされているものに依っていて、それを症例の最初から無意識は生産しているのです。

突然思いついたのですが、分析家のような人にとりすべては分析的な形式を与えるために症状をひきおこすに違いなく、ここでとてもよく描かれているある機能を満たすことも必要なのです。つまり無意識の形成物からシニフィアンの再試行を引き起こすことです。それで私は自問しました—無意識の解釈以外の解釈は存在しないのですから—症例提示のはじめに注意を促されているように、「罪悪感を解くことをしない」という立場（position）をどう評価すべきだろうか。

ほかに知りたいのは、治療の終わりは過ちの主體的な記載を生み出したのかどうかです。この女性の最初のすばやい反応は負傷者たち、数多くの「横たわるキリスト」、テロの犠牲者たちには関わらないでとにかく走って逃げるといったものだったわけですから。べつの言い方をすれば、この患者にとっての罪責の治療とは、どのようなものだったのでしょうか？

ヴィセンテ・パロメラ）多くの事柄についてすでに得るところがありました。二つの点を強調したいと思います。まずアラセリ・フエンテスがすでに示したように、症例のなかで最も矛盾していて真に特徴的なのは、この女性が自分にとって完全に未知のものだった憎しみと出会うことです。リカルド・アランツによる鼠男の症例への言及は、とても適切だと思いました。本当のことなのですが—そしてこれは模範の価値を持っています—主体がトラウマ的な状況に従属した状況に陥るとき、自らの欲動を誤認すればするほど、「トラウマ化した」身分（statut）のなかに身を置いてしまいがちです。逆に、自らに住み着いている享樂についてなんらかの知を持っている主体は、それほどには脅かされないものです。それでじっさい、この女性はこの時未知のものに対峙している

自分を発見したのでした。

しかしながら、私たちは「移動要因」を喚起することもしました。それはキリストのあの像において、ある何かが幻覚的な形で回帰するということを意味していて、この人物像は移動もしくは抑圧という形をしてではなく、知覚されたものの形でかえってきているのであり、かならずトラウマの事後において回帰するということです。

そういう理由で第三の時が必要なのです、夢の時間、幻覚の形で回帰した像を入念に作り上げるための時間です。私はそれがピエール・ジル・ゲゲンが言ったような幻想的な次元のものなのかは分かりません。私はむしろフロイトが「快原則の彼岸に」のテキストで喚起している、悪夢の形をとったトラウマの回帰のようなものが問題であると言いたい気がします。

たしかにテロ以前から問題をすでにもっている女性にかかわっていることについては、私も賛成です。視線、息子の視線から身を引き離すことが出来なかったことに、彼女は苦しんでいます。そのせいでキリストの視線がその位置を占めにやってくるのです。トラウマの臨床においては、そしてそれは症例が教えてくれている主要なことです、それぞれの時間を区別する必要があります。最初の時とは、主体がトラウマの現実界との出会いからつくる談話（*récit*）の時間です。二番目の時とは、かならずトラウマにたいして主体的なかわりか、もしくはその内在化が存在するという事実起因しています。その結果、主体的な関与がない場合は、トラウマ的な出来事の影響はありません。この症例では、主体的な関与が依拠する媒介的要素は、逃げていたあいだ、一人の負傷者に遭遇し、それがキリストの像を呼び覚ますことです。それは生じない可能性もあったでしょう。でも、分析家の解釈という手段によってではなく夢という抜け道によって実行された作業すべてを可能にしたのは、それなのです。夢はハンドルを構成していて、それが知覚水準を超えて物事を移動させメトニミ的に操作する、こう言ってよければ、トラウマの出来事の連鎖とは区別される、表象のべつの連鎖のなかに、物事を記載するのです。

ファン・カルロス・タゼジアン）ルシア・ダンヘロが過ちにかんして開いた道を進もうと思います。過ちを通して主体的な関与の最初の時が存在するなら、第二の時もまた存在し、それは憎しみと、たぶん恥の時だと言われています。二つのあいだの違いは何か、考えなくてはならないでしょう。私には主体の分割を証明する過ちとなったものをうまく想像することが出来ません。

アラセリ・フェンテス）分析家の位置については、ルシア・ダンヘロの考察と一緒にです。宗教の側であれ人種差別主義の側であれ、意味が生産物をふさがな

いように私は努めました。空いている場所を守り抜こうとつねに試みていたと思います。原稿に書かなかったことでたぶん分析家としての私の位置についていくらか明らかにしてくれるだろうことを、ここで付け加えようと思います。この女性は夢を語るまえ、ひとつ失策行為をおかしています。私のいる援助組織には向かわない、反対方向のバスに乗ったのです。それは全くあたかも完全に取り乱した彼女が爆発の中心から逃れるために走ったかのようで、テロの場所から遠ざかるよう、そこに来た最初のバスに飛び乗ったのです。彼女は電話をかけてきて私にこの失策行為を説明しました。症例の談話のなかにはこのエピソードは入れませんでした。私が強調したいのは、この女性の人生で開いていた穴というものを、意味が塞ぎにやってくるように努めたということです。じっさいのところ、横たわるキリスト像のおかげでトラウマにおける主体のかかわりというものが存在しましたし、最後にはあの視線の上にある覆いが敷かれ、結びの夢で、顔のない男が現れ、彼女を落ち着かせるのです。

フランシスコ・ローザ) たいへん具体的な質問をします。カルミナ・オールドネスという人物について彼女は何を知っていますか？それは第六の夢に登場しています。その死について彼女は何か知っていたか、あるいはこの女性は彼女にとって女性の理想をあらわしていますか？

アラセリ・フェンテス) 確かにカルミナ・オールドネスはこの時代に亡くなりました。この女性は新聞や雑誌でよく取り上げられましたし、私の患者とほぼ同じ歳だと思います。その上、この名前は患者の名前「カルーミンナ (Car-Minna)」を含んでもいます。この女性は闘牛士たちの娘であり、妻であり、母でした。彼女は浴槽で死んだ状態で見つかり、自殺だったのか、薬の過剰摂取による死なのか分かっていません。患者がカルミナ・オールドネスについて語ったのは、彼女が3か月の間癌をなおざりにしていたと私に言った日でした。「私のからだで起きていることには傷つかないのに、テロがこんなに私を傷つけるなんて奇妙です。」とも言いました。でも直後に、カルミナ・オールドネスの死の夢を見たに違いありません。

ジャック＝アラン・ミレー) あまりシニカルな態度を取りたくないのですが一ほんの少しだけ。今やマドリードのテロの時から私たちは遠いところにおいて、あれは一つのスペクタクル、世界規模のスペクタクルを構成したと言うことが出来ますし、この女性がとてもよく教えているように、イスラム教原理主義者の超生産物 (super-production) は、彼女のからだで生じた小さな嚢胞よりも重大なことでした。ここに来るあいだの機内で、私はボリス・グロイス氏の記事

を読んでいました。彼はドイツ人の教授ですが、少ししたらバルセロナで講演して彼の最新の著作を—これはまだ本屋にはなくて、新しい主題についての本ですが—紹介するはずで、ウサマ・ビン・ラディンは彼にとってはひとりのプロデューサーで、世界規模のスペクタクルのビデオのプロデューサーです。「彼はマンハッタンではじめ、マドリードでも続ける」—この上もなくシニカルな考察です。この患者は同じスタイルのことを言うに至っています。

すでに知っていることを確かめて満足するのではなく、新しい観点で見てこそ、私たちはこの症例から学ぶことが出来ます。教えてくれるのは各症例にある新しい物事です。

私たちにとって治療的効果の速さというものが主要な問いであったことは、今まで一度もありませんでした。今そのことに気を配っているのは、私たちがフランスで被ったトラウマが原因です。私たちはアコワイエ氏とインセルム¹²の科学的と称するレポートにぶつかったのですが、このレポートは治療の評価にかんするもので、精神分析は中でも一番出来の悪い生徒であり、他方 TCC は—これも通常は大いなる威光を享受しているとは言えませんが—審査員たちの賛辞つきの評価を得て終わっていました。私たちはそのことで壊死させられましたが、いまは物事があるべき場所におさまったことにととても満足しています。つまり私たちが一番上で、他の人たちは・・

アラセリ・フエンテス)・・下のほうに。

ジャック＝アラン・ミレール) そうなのですが、話はまだ終わっていません。私たちはトラウマから回復しましたが、今度は他の人たちがトラウマを負った状態にいて、毎日、新聞で怒りの声をあげています。これはとても面白いことです。ですから、被ったトラウマのせいで、私たちは問いを提示するのです。誰がもっともうまく治すのか？分析家か、あるいは二十一世紀の修正的パブロフ主義の新催眠術師か？私たちににとってはずいぶん前からよく知られている人物です。彼は二十世紀の半ばにはとても評判が悪かったのです。私たちはどうして急な変化が最近起こったのかを見る必要があります。パブロフは東と西の交差したところにいました。ピアニストやダンサー、チェスの競技者らとともにアメリカ合衆国に評価された唯一の旧ソ連人で、それは彼が **fast**、迅速だったからなのです。ここには速さの主題にかんして、共産主義と資本主義の一致点が存在します。そのうえスターリンはアメリカ精神とスラブ精神のもっとも良いものを結び付けなければならないと主張していました。催眠、行動主義、パブロフ主義は同じ家族の出です。行動主義のセラピーはすべて暗示によって

¹² フランス国立保健医学研究機構

行われ、患者に自身への信頼を回復するよう暗示をあたえることにより「治す」ことを目標としています。これら自信の教授たちはその主題にかんする本を書いています。「自信がもたらす幸福」。

二日前にルモンド紙がある人の意見を載せていましたが、彼は医者と名乗り、フランスの厚生大臣のことを例のレポートと距離をとってインセルムを攻撃したとの理由で非難していました。大臣、政治家が科学を非難するなどかつて見たことがないと彼は言っています。この意見の持ち主はどんな人物なのでしょう。グーグルで素早く検索すると、ちょっとした不幸と同様に大うつ病にたいする薬として、自信を推奨するような本を書いていると分かりました。また彼は「スティミュラス」と呼ばれる会社の相談室を運営していて、おまけに10人の大学人とともに一冊本を書いていました。どの国の人がお分かりですか？ケベックです。ですからいまや彼は政治の闖入にたいする科学的精神の擁護者となっているのです。この「スティミュラス氏」は私たちにとって天の贈り物だと言わなければなりません。この人たちは今までは影に身をひそめていたのです。今彼らは出てきたので、私たちが誰にかかわっているのかが分かるようになりました。

ですから、自分自身への信頼を用いて治せると主張するセラピーが問題となっています。「我々は治せます、素早く治します、ある一定の病気にたいし、治癒に必要な面接数を見積もることが出来ます」と主張しています。これは私たちのスタイルではありません。私たちは幸福の商人ではないし、自信の教授たちでもないのです。それどころか主体が自信を無くすことも分析には必要とされ、その穴が開かれたまま作業が行われるよう、あまり早く自信を取り戻さないことも必要とされると考えます。もし治療的効果があるとすれば、それは間接的なものです。ブリーフセラピーはあの *furor sanandi*⁽¹³⁾、治したい欲望の例そのもので、それにたいしフロイトは警戒していました。

分析的治療は性質から言って長い時間かかるものですが、認知行動療法はブリーフセラピーのように紹介されています。それはまず治療者から被るプレッシャーに主体は長いこと耐えられないからでしょう（笑）。治療者は患者になにがしかの道徳的プレッシャー、場合によっては肉体的プレッシャーをかけ、拷問は延長されることができないのです。あの忘れられない傑作、*Orange mécanique*（時計仕掛けのオレンジ）¹⁴を見れば、それはとても良く分かります。

分析がはじまってまもなくしてか、分析に入るとほぼ同時に、主体が良くなることに私たちが立ち会うのは確かです。それは一年間続くこともあります。

¹³例えばこの言葉が出てくるのは以下「治療上の情熱も安全第一主義で危険なしに済まそうとすれば済ますこともできる」、フロイト著作集9、126ページ。

¹⁴ アンソニー・バージェスの小説で、キューブリックが映画化した。

アメリカ人たちはそれを分析の **honeymoon**、蜜月と呼んでいます。私たちはより詳細にこの時について研究して、スティミュラス氏たちの強力なプロパガンダに対応しなければなりません—強力なというのは、彼らは自分たちに自信を持っているからです。

この点についてなぜパリの **CPCT** による研究がまだ存在しないのでしょうか。バルセロナの **CPCT** はまだ出来て間もないので分かるとしても？それはおそらく迅速な効果を持つが長期にわたる分析的治療しか私たちは経験していないからでしょう。そこで問いが提出されます。精神分析において迅速な治療のような何かを定義することは、可能なことでしょうか？

アラセリ・フェンテスの症例から始めたのは良いことでした、これはもっとも早い症例のうちの一つで、二十回の面接の症例ですから。しかし勝者は三回の面接であるアントニ・ヴィセンスです。続いてアラセリの二十回（笑）。じきに私たちは一回の面接の症例を持つでしょう。一回かぎりの面接治療はすでに発明されています。極めつけはゼロ回の治療です（笑）。誰かがある講演を聴いて、治っている自分を発見することです。

今日では人々が危険やテロの状況にさらされてトラウマを被る場合、治療者たちはそのサービスを提供すべく現場に駆けつけることになっています。他の人たちはそうしていますが、そこでなにが起きるのか知るため、同点になるように、私たちも同じことを試しています。でも本当に介入することが必要なのか、人はゼロ面接（面接なし）でも自分自身で治るのではないか、自問してみるのもいいでしょう。ラカンがハンズ少年について指摘しているように、大部分の子どもの恐怖症はひとりでに治るものです。しかしながらハンズ少年は父親、母親、フロイトを動かしましたし、フロイトの背後には分析の共同体全体がこの症例を読み研究しています。ハンズの恐怖症が私たちに教えてくれるのはとても重要ですが、一番多いのはその現象自体をある期間耐えれば十分なものです。確かに様々なトラウマのあいだにある区別を確立することが適切ですが、私はゼロ面接の方法、**The Zero-session Treatment** を提唱いたします（笑）。これはより経済的で有効かつ迅速に効果をもたらすものですが、とても難しいものです。それから、ゼロ面接を推奨する治療者にたいして、支払いをしなければなりません（笑）。

私は全てのトラウマがこのような経過を辿るとは言いません。トラウマがある症例のなかでは、理由を問うことが適切です。マドリードのテロの時、ある人々はトラウマを被り、別の人たちは違いました。火災や死があればトラウマが存在するのに十分だというわけではありません。血と暴力の凄まじい光景であれば、人々は楽しむために映画館へ見に行くものです。テロがあったのだからトラウマが存在するのだと言うのも十分ではありません。危険はそのもの自

体としてはトラウマ的なものではありません。たとえばバンジージャンプをする人たちのように、楽しみのために喜んで自分の身を危険に置く人たちもいます。危険なスポーツはたくさんあります。私にかんして言うなら、スポーツはどれも危険なものです（笑）。ラカンを勉強しながら机に向かっていれば、私たちは確かにより安全です。

なぜこの症例においてトラウマが存在したのでしょうか？この症例はひとつの原則を私に示唆するものでした—それが機能するかどうか見てみなければなりません—その原則とは、「トラウマが生じるのは、ある事実（un fait）が、言われたこと（un dit）、患者の人生にとって根本的に重要なひとつの言われたことと対立することになるときである」、「事実と言われたこととのあいだに矛盾が存在するとき、トラウマが生じる」、です。

この症例で言われたこととは、名高い「愛そのものである父」のことです。ミンナは幼少時から愛そのものである父が監視している世界、まったく愛、本当のキリスト教主義によって秩序づけられている世界に住んでいました。これは（片方の頬をぶたれたなら）別の頬も差し向けよと厳命するものです—もし別の頬がまだ残されていた場合のことですが（笑）。ミンナをトラウマ化するもの、それはもはや差し出すべき他の頬を持っていないということです。まったく愛の父の世界においては、これは理解不可能な事実なのです。他人というものは野蛮な動物であり人は自分で自分の身を守らなければならない、もし殺されたくなければ先に殺さなければならないのだと父親が考え、そのような世界のなかで彼女を育てていたなら、私たちは確実に違う話に関わっていたことでしょう。そのような世界観の中であればテロ行為によってそういう父の教えが確認されることになったはずですが、彼女の場合は、テロ行為が彼女の住む世界の支柱を消滅させてしまうのでした。

比較のために1751年のリスボンの大参事について考えてみましょう。当時はまだこの名は使われていませんでしたが、それは津波でした。気の毒なライブニッツが皆に説明したところによると、神はすべて最善を計らっていて、世界は可能世界のうちのもっとも善いものであり、悪はその必然的な構成要素であります。数分でヨーロッパの首都の一つを消滅させたあの津波が神の計算のなかに入っているならば、神のコンピューターには調子のおかしいものがあるに違いないと各自叫びました。それはヨーロッパ思想史の、決定的な時でした。リスボンで津波があったという事実、そしてライブニッツの見方が破滅に向かったという事実からすれば、マンハッタンとマドリードのテロは私たちにとりそれほどトラウマを与えるものではもうありません。

しかしながら、最近のテロ行為が重大な知的疑問を突きつけることになったのは間違いありません。文明とは何であるか？いくつかの点においては、野蛮

な文明というものが存在するのか？イスラム圏の場合はそうなのか？それとも全くそんなことはないのか？

いずれにせよこの女性にとってトラウマは、あるずれ、ある不一致の結果であるように私には見えます。法、まったき愛の父の法によって治められた世界と、法なき現実界の出現のあいだにある、ずれ、不一致のことです。「現実界は無法地帯である」、これはサントームのセミナーにあるラカンの謎めいた言い返し¹⁵です。フランスで来月出版されます。

ミンナの世界は法を伴う世界です、何故ならまったき愛がその世界を取り仕切っているからです。そのような世界と、法のない何かの不意に出現することとのあいだ、また自身のなかに彼女が発見する憎しみとのあいだには、矛盾が存在しています。それで世界はその時彼女には読めないものとなるのです。

大変すばらしいのは、転移がはじまること、そしてあの恐ろしい真実、現実界は無法地帯であるということを見た後、最後再び彼女が心穏やかに眠ることができるのを確認できることです。津波が一分後にやってきて私たちや私たちの諸概念を破壊しないとすれば、それは偶然の結果に過ぎません。バルセロナの津波はいつでも突然起こりうることです。エールフランスの飛行機がアルジェリア人反逆者らにより迂回させられ、もう少しでエッフェル塔に激突するところだったようです。そういうことは至る所で起こり得ます。ですからどのように一まさに夢のおかげでしたが一主体が人類に共通する夢想 (songe) を回復するに至るのかが分かるのは、大変すばらしいことなのです。

ヘラクレイトスは、夢を見ると人はその世界にただ一人存在している、他者とその同じ世界を分かち合うのは目を覚ましてからに過ぎない、と言っています。真実はむしろ、目を覚ましているとき、私たちはみな同じ夢を分かち合うというものでしょう。トラウマと私たちが呼ぶものは、私たちが共通の夢から外に連れ出すもの、多かれ少なかれ全てはうまく終わるだろうとか、人生は続いていくといった共通の夢から、外に連れ出すものことなのです。

治癒と人が呼ぶようなものは、眠りを取り戻し、共通の夢想を回復することにあります。それは「意味が回復された網の目」について語るときにアラセリが大変うまく言いあらわしている何かです。無意識は大他者のディスクールであることを示したいなら、私たちにはここにまったくうってつけの例があります。

人はこれらの夢の一つ一つから戯曲を書くことが出来るでしょう。たとえば、トラウマ後の悪夢「キリストである男性が地面に横たわり、彼女を見つめている」からです。彼は彼女を思い出しています。それは神のような、負傷した男性で、彼女を見捨てた父親の顔なのです。彼女は打ちひしがれたキリストの身

¹⁵ Le séminaire Livre XXIII, pp.137

体のなかに具現化されているのです。

別の点をあげます。転移はではいつ始まったのか？私の意見ではアラセリが彼女に辞書を頼んだ時に始まっています。ルーマニア語のものですよね？

アラセリ・フエンテス) そうです。

ジャック＝アラン・ミレール) 彼女はあなたに父親と幼少期の故郷への関心を明らかにしています。そしてすぐに転移の夢を持ってきます。あなたがその言語のキーを彼女に求めたとき、メッセージが届くのです。アルチェリは「私はあなたにコードを要求します」と言い、ミンナは「私はあなたにメッセージを与えます」と答えているのです。こういうことすべてが従っている完璧なロジックがちゃんと感じられます。カオス、テロ行為、悪夢、トラウマ後の症候学の場所に、非の打ちどころのないひとつのロジックが働いています。

そして第二の夢がやってきます。「たくさんの人が彼女を見つめていた。彼女は自分が落ち着いているのを感じていた。一人の女性が留まるようにと彼女を誘う。」これは分析状況の再現です。

第三の夢で、彼女はブカレストの下水道にジプシーの女性と一緒にいて、トンネルの先には光があります。これがいつものテーマであることに注意しましょう。いいのです、私はあの女性と一緒にいて、外に出られるし、ジプシーの女性は私を立ち去るがままにしてくれます。彼女はこのことによって母親の言葉に背いているのです。それと同時に、ある解決策ができてくるのが感じられます。第三の夢についてのアラセリのコメントの最後に読みとれるように、それは宗教的に言われていることと決別することにあります。「彼女は息子が頼んだ助けよりも宗教的な掟を優先する両親に激怒します。」これがテロのなかで、言われたもののなかで、トラウマを生むものとして明らかになったものです。

続いて彼女は **La Cruz de los caidos** (カイドスの十字架) を訪問します。私の記憶が確かなら、というのは写真でしか見たことがないからですが、巨大な十字架がかかっています。これはそれ以前に想像界のなかで体験されたものの象徴化です。つづいて「vis」(ねじ) という語が出現し、ルーマニア語でこれは「serpent」(蛇) に近い語ですが、これはパルカたち¹⁶の具象化以外のなものでもありません。「幸せが完璧な私たちで存在していた楽園からの追放です」と彼女が言うのが、まさにここでした。夢はトラウマを再現しています。彼女はじっさい愛そのものである父の幸福のなかを生きていましたが、これこそテロ行為が破壊したもののななのです。こうして人生の糸、これは「愛そのものである父」の幻想によって覆われていたのですが、これがあらわになったと言

16 ローマ神話における運命の三女神

えるでしょう。

第五の夢。「一匹のワニがいて私以外のみんなを噛んでいます。」これは見事です。彼女は難を逃れています。これは「私がトラウマを負った者になったことを除いては、すべてうまく行っています」ではありません。その逆です。「私以外」なのですから。そして「私はその尻尾をつかまえて宙に逆さ吊りにします、その口は開いています」。素晴らしい。この夢についてアラセリの非の打ちどころのないコメントが続きます。「彼女はファロスを持っていて、それをどうすべきかを知っています。」もう驚くことはありません。

第六の夢についてはゴシップ誌のシンボル、カルミナ・オールドネス、は、愛そのものである女性であるか、またはすべての愛そのものである女性であると理解しようと思いました（笑）。彼女は愛そのものである父とつり合う、すべての愛をもつ女性です。

第七の夢は「顔のない一人の男性がいました」ですが、私は頭を二つもった王が出てくるヴェデキントの「春のめざめ」を思いつきました。ラカンはこのことについてこれはたぶん顔のない人物がいるからだろうと言っています¹⁷。ここで私たちが会うのはそういう人物なのです。つまり、もはや知っている主体は存在せず、現実界は無法地帯であり、法的なものには王がいないのです。世界に王がもはや存在しないのです。

去勢、人間の去勢だけがここで問題になっているわけではありません。それは主体にとって、トラウマを産みだすあらゆる理想化を手放すことが可能になるような点なのです。理想化がないならば、トラウマもありません。

それは古代の知恵の理想でした。神々を信じないこと、その善意を信じないこと、そうやって到来する物事は意味を欠いたものとして捉えられるのです。

これらすべてはマンナの話が結局ひとつの幸運であったと考えさせます。このお話、少なくともアラセリが語ったそれは、完全なものです。私たちは「これ以上にはなり得なかったろう！」と思うのです。この先があるという感じはいたしません。

この主体にとって、身に起きた悪、苦しんだ病気について、この話はまったく完全なものです。私が思うに、これは迅速な分析的治療の一つの例でしょう。「私たちはそれが出来る」と言うことが出来ます。私たちにはそれが出来ますが、催眠術師やパブロフ主義者には出来ません。このトラウマを治療するのに彼らと言えはそのセラピーをもって患者を「反対に一トラウマ化する」、言い換えれば第二のトラウマを生み出すつもりでしょう。

私はこの治療を推進することに賛成ですが、それは一つの理想としてではなくて、二十回の面接のあいだで私たちが出来ることの一例としてです。でも私

¹⁷ Préface à L'Éveil du printemps, pp.563, in Écrits.

私たちは目下三回の面接について、討論すべき状況にあります。これは私たちが歩んでいる迅速さを示すものです（笑）。